

欧米諸国の看護婦の紹介記録の歴史を辿る

—幕末から明治初年—

鈴木 紀子

看護史研究会／国士舘大学人文科学系博士課程

日本人が海外の病院を訪問し、その見聞記録として最も早く海外の看護法を紹介したのは、万延元年遣米使節団（1860年）随員、玉蟲左太夫の『航米日録』（沼田次郎・松沢弘陽校注『日本思想大系66 西洋見聞集』岩波書店、1974年に所収）の、北米ワシントン病院見学記録である。

幕末明治政府は、条約改正交渉やパリ万国博覧会参加などを目的とし、使節団を計8回派遣した。使節団員の残した記録の中には、病院見学の記録もある。福沢諭吉は、一年間のヨーロッパ訪問の記録を『西航記』『西航手帳』にまとめ、パリの最初の訪問先ラリオアジェル病院に、「ノンと名くるものあり」と、修道女看護婦の事を紹介していることは有名である。しかし、山内慶太氏が「遣欧使節での成果が、その後日本の近代的な医療・福祉の制度の形成にどのように影響したかということについては研究の必要がある」と述べているように、米欧見聞記録に残されている病院見学記録に関しては、医療史および看護史の中では殆んど取り上げられてこなかった。

今回、幕末から明治初年にかけて米国・西欧諸国を訪れた使節団員が、病院や看護婦に関して記録しているものとして以下のものが確認できた。

- 長尾幸作（万延元年遣米使節団の護衛艦威臨丸の乗組員）の『亜行日記鴻目魁耳』に入院記録（日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』第二巻，風間書店，1961年）
- 益頭駿次郎（文久元年遣欧使節団）の『欧行記』に陸軍病院見学記録（大塚武松編『遣外使節日記纂輯第1～3』日本史籍学会，1930年）
- 久米邦武編，田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』（岩波書店）には以下の病院見学記録があり、巴黎府の軍病院と羅馬の軍病院の記録に、看護婦「ノン」のことが紹介されている。
 - 華盛頓（ワシントン）の精神病院（第一巻，p.252-253）
 - イギリスグリニッジの海軍病院（第二巻，p.377）
 - 巴黎府（パリ）の軍病院（第三巻，p.118）
 - 伯林（ベルリン）の大病院（第三巻，p.321-322）
 - 羅馬（ローマ）の軍病院（第四巻，p.321）

岩倉使節団には、わが国の近代看護教育の始まりに大きく関与した人物が、2名参加していた。ひとり1872（明治5）年3月から文部大丞の田中不二磨理事官の私設顧問の資格で、フランス、スイス、ドイツ、ロシアの教育視察に同行し、各国の教育事情の調査研究を行った新島襄である。新島は1886（明治19）年4月に、「京都看病婦学校」を設立した。もうひとり、岩倉使節団に参加した5人の少女のひとり、大山捨松（参加当時の名は山川捨松）である。大山は、帰国前の2ヶ月間コネティカット看護婦養成所に短期入学し、看護学を学んで帰国、日本で初めての慈善バザーを開催し「有志共立東京病院看護婦教育所」開校のために尽力した。つまり、わが国における看護婦養成の始まりは、岩倉使節団に関係していた人々が影響している。

本研究は、幕末から明治初年にかけて米国、西欧諸国を訪れた使節団員が書き記した病院や看護婦に関する記録を辿り、病院やそこで働く職業看護婦をどのように見てきたのかを明らかにすることである。さらに、これらの記録を、わが国の近代看護の始まりに関連した「看護史」として位置付けることを目的とする。